

SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

あの子を探して

(一個都不能少／Not One Less)

1999年・中国、アメリカ合作映画・106分
配給／ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント

2003 (平成15) 年11月24日鑑賞
＜ホクテン座・中国映画特集＞

Data

監督：張藝謀 (チャン・イーモウ)
出演：魏敏芝 (ウェイ・ミンジ) /
張慧科 (チャン・ホエクー)
/チャン・ジェンダ / カオ・
エンマン

みどころ

後に、張藝謀 (チャン・イーモウ) 監督の「しあわせ3部作」とネーミングされた作品の第1弾。主人公は辺鄙な農村にあるわずか28人という小学校の1カ月だけの代用教員だが、何とこれが13才の女の子。貧乏のために学校をやめ、1人都会に出稼ぎに出た男の子を探して、彼女も1人大都会の海の中へ……。彼女の力で本当に彼を連れ戻すことができるのか……。？教育の大切さと人間の善意をイキイキと伝える心温まるストーリーに感動。

＜張藝謀監督の多くの話題作＞

張藝謀 (チャン・イーモウ) 監督は、2003年8月、日本で公開されて大反響を呼んだ『HERO (英雄)』の監督で、中国第五世代監督の旗手の1人だ。その張藝謀は、①1987年の『紅いコーリャン』での衝撃的な監督デビュー以降、②『ハイ・ジャック 台湾海峡緊急指令』(88年)、③『菊豆』(90年)、④『紅夢』(91年)、⑤『秋菊の物語』(92年)、⑥『活きる』(94年)、⑦『上海ルージュ』(95年)、⑧『Lumière et compagnie』(95年)、⑨『Keep Cool / 有話好好説』(97年)と次々と話題作を発表してきた。これらの作品はそれぞれに強烈な社会的問題提起が含まれており、世界的な注目を集めてきた。

2003年11月、NHK衛星放送第2の深夜番組は、1時間にわたる張藝謀監督特集を組み、その作品を詳しく紹介、解説した。そして『菊豆』(90年)、『秋菊の物語』(92年)等を次々と放映したから、多くの張藝謀ファンや中国映画ファンはこれを感激しながら観たことだろう。

<張藝謀監督の10作品は・・・？>

しかし張藝謀監督が1999年に10作品として監督した『あの子を探して』は、それまでの作品とは大きく趣を異にし、特別強烈な社会的な問題提起をしたものではなく、貧しい農村のオンボロ小学校へ代用教師としてやってきた13歳の女主人公と28名の生徒との交流を描いた心温まる作品。

張藝謀監督はこの作品において、貧しい農村の小学生たちに焦点をあて、家が貧しいため小学生の時から出稼ぎに行かなければならない子供たち、チョークや文房具すらろくに買えない小学校の実態などを広く世界に紹介し、子供たちの教育に対して光をあてることを目指したのだった。そしてこの舞台となった河北省赤城県チェンニンバオ村にある水泉小学校では、見事にこれが実現。多くの人々の善意や寄付金によって、どれほど多くの子供たちが救われたかを如実に中国全土に知らしめる作品となった。

『あの子を探して』が、その後続いた『初恋のきた道』（00年）、『至福のとき』（02年）と並び、張藝謀の「しあわせ三部作」とネーミングされる由縁がここにある。

そしてこの作品は、1992年の『秋菊の物語』でヴェネチア国際映画祭の金獅子賞（グランプリ）を受賞したのに続いて、二度目のグランプリ受賞となった。

<ストーリーの骨子は邦題タイトルどおり>

この映画の骨子となるのは、邦題のタイトルどおり、13歳の代用教師の魏敏芝（ウェイ・ミンジ）先生が、ある日突然都会へ出稼ぎに行くことによって学校にいなかった4年生（10才）の腕白な男の子、張慧科（チャン・ホエクー）を探しに行き、数々の苦労を重ねたうえ、これを連れ戻すというストーリー。そしてその原作となったのは、施祥生（シー・シアンション）が書いた『空には太陽がある』という作品の、村の先生が都会まで教え子を探しに行くというストーリーだった。

<チョークは貴重品>

魏が勤める水泉小学校は、本当に辺鄙な田舎の学校。校舎はボロボロだし、生徒の数も減り続けている。そのうえ教師の給料の支払いも遅配しているらしい。魏がここへ代用教師としてやってきたのは、カオ先生が1カ月間休職するためだ。そして「1カ月ここで働いたら50元くれる」と聞いたから。もっとも、本当に払ってくれるのかはちょっと頼りなさそうな雰囲気があるが、カオ先生からは、「間違いなく払う」と言われた。その上、カオ先生は「帰ってくるまでに生徒の数が減っていなければ別に10元やるよ」と言ってくれた。魏はその言葉を励みに生徒たちと向かい合ったのだ。もっとも、魏が教えられるのは、ちょっとした歌くらいのもの。だからカオ先生は、「教科書の字を黒板に書き写し、生徒たちにそれを書き取らせるように」と魏に指示をした。しかし黒板に書くためのチョークは貴重品。1日1本が使用限度。字が小さすぎると目が悪くなるからダメだが、逆に字

が大きすぎてもチョークが無駄になるからダメ。何ともケチくさい指示だが、この時代の中国の田舎の小学校ではそんな実情だということがよく分かる実に面白いエピソードだ。

＜1人抜けてしまった！＞

魏が授業を始めようとした途端に、車に乗って学校を訪れてきたオッサンはまちの人。彼は村長と相談しながら、1人の足の速い女の子をまちの学校へ「特待生」として連れて行くつもり。魏は「それはダメだ！」と拒絶するが、女の子の意見を聞くと、女の子は「自分に行きたい」という考え。それでも魏は、この女の子を隠して必死で抵抗するが、結局ダメ。この女の子は車に乗せられて、まちの学校へ転校していくことに。ああ、1人減ってしまった……。でも本人の希望だから仕方ない。それにしても車を追って走っていく魏の足もすごく速い。さすが野生児……？

＜生徒との会話は真剣なものに……＞

張が突然学校をやめて都会へ行ったのは、親が病気になったためやむを得ず都会へ出稼ぎに出るためだ。魏は28人の生徒を教えることに意欲を持っているわけではないし、生徒たちに対して愛着を持っているわけでもない。だから最初はその教え方はかなりいい加減というより、はっきり言ってデタラメ。生徒の数が減るとカオ先生が約束してくれた10元がもらえなくなるから困るだけなのだ。しかし、出稼ぎに行った張を探して連れ戻すという目的がはっきりした後は、その実現のために魏と生徒たちとの会話は急に真剣なものとなった。

＜都会へいくバス代がない！＞

バス代はいくらかかるのか？みんなでお金を出し合おう！足りない分をどうするのか？レンガ運びのバイトをやればいくらもらえるのか？何個運べばいいのか？何日かかるのか？etc……そういう協議と計算をしてコトに臨んだ（つもり）。しかし実際はレンガの運び方が間違っていたり、バス代についての情報が間違っていたりと失敗ばかり。さらに駅に向かう途中、生徒たちからせがまれて、バイトで稼いだお金の一部をコーラを買って飲むのにあてることに。しかしコーラ代は1本3元もするから買えたのは2本だけ。もっとも生徒たちは生まれてはじめてコーラという飲み物を少しでも口に含めたのだから良しとしよう……。こんな共同作業の中で魏と生徒たちとの間の交流が生まれ、さらには算数の計算の勉強も進んだが、結局お金は足りなかった。半分無賃乗車のような形で魏はバスに乗り込んだものの、途中で下ろされ、結局魏は徒歩とヒッチハイクで都会まで行くことに……。日本人もこの強さを見習わなければ……。

＜あの手、この手での都会での人探しは……？＞

魏は張が寝泊まりしているはずの住所まで尋ねていったが、そこで同じく出稼ぎにきて
いる同僚の女の子に尋ねると、張とは駅ではぐれてしまったとのこと。さあ大変……。
魏も1人で都会に出てきたものの、しょせん13才の女の子の知恵しかないから、どうや
って張を捜したらいいのかわからない。そこでとりあえずその同僚の女の子に、「はぐれた
駅まで案内しろ!」と交渉。その交渉はかなり強引だが、相手の女の子もしたたか。「1日
分の日当を補償しろ!」ときた。やっと値段は2元(約30円)と決まったものの、「先払い」
を要求する相手に対して、魏は「後払い」の回答。そして先払いなら2元、後払いなら
2元5角(1元の2分の1)という差がついたが、結局魏が選んだのは後払い。そして
現実に支払うのも、すべての労働を果たしたかどうかについての激論の末だ。この小さな
女の子同士の何ともシビアな金額交渉は面白いし、勉強になる。日本人も見習わなけれ
ば……。

2人は駅に着いたものの、いくら捜しても張は見つからない。そこで思いついたのは、
駅でよくやっている迷子のマイク放送。しかし、2日前の迷子を駅でマイク放送しても
らってもそりゃムリだろう……。

そこで次は尋ね人のポスターづくり。そのために魏はなけなしの金をはたいて紙と墨汁
と筆を買い、徹夜で何十枚もの尋ね人のポスターをつくったが、駅で寝ていたオッサンか
ら、「そんなものは無駄だ」と指摘された。誰が考えてもかなり正しい指摘だから、魏も納
得せざるを得ない。しかしここからが魏は強い。「なら、どうしたらいいの?」と食い下が
った。それに対するオッサンの答えは、TVで呼びかけてもらうこと。

<局長さん捜し、そして遂にテレビに出演!>

たしかにそりゃそうだが、そのためにどの位のお金がかかるのかを教えていないから、
かなり不親切なアドバイスと言わざるを得ない。しかし子供の魏にはそんなことわからな
い。何とかTV局を探しあてて行ったものの、ここでの関門は受付のオバサン。紹介者も
いないし、身分証明書さえ持っていないのだから、この受付の段階で立入禁止となるのは
当然だ。何とも人情味のないオバサンだが、規則に従っている以上は仕方がない。ところが
このオバサンは、「局長さんはいい人だから、局長さんに頼んでみたら……」と変なア
ドバイスをした。そこで他に頼るところがない魏は、1日中TV局の門の前で、行き交う
人々に対して「局長さんですか?」と声をかけたが……。

この「局長さん」頼りのパターンは、張藝謀(チャン・イーモウ)監督の『秋菊の物語』
でも使われている。『秋菊の物語』では、コン・リー扮する、大きなお腹をかかえた妊婦が、
話のわかる局長さんの「はからい」によって調停・訴訟が正しい方向に向かうのだが、『あの
子を探して』でもそれは同じ。1日中門の前で局長さん捜しをしている13才の女の子を
かわいそうと思うのは、通常感覚をもっている人間なら当然。親切な局長さんは受付の
オバサンに対して、「何ということをするんだ!」、「かわいそうだと思わないのか!」と怒

り、魏を部屋に招き入れてくれた。そして魏に食事を与え、あるテレビの番組で「尋ね人」をやるように指示してくれたのだ。

＜都会のTV局は美人キャスター＞

魏が代用教師として勤めている学校は農村にあるが、同じ時代でも都会はすごい。その格差は大きく、天と地ほどの違いがある。自転車やバスが走り回り、時々自動車も走っている。また行き交う人々はいっぱい。そして小ざれいな服装の人も多く、中には近代的ファッションに身を包んだ人も……。そしてTV局のキャスターは最新のスーツをキリッと着こなした美人。今のTVのニュースキャスターと同じだ。このキャスターの質問に魏は緊張してロクに答えられないが、「張に呼びかけて！」との誘導に対して、魏はどっと涙を流しながら、「3日間も捜したのよ。早く連絡して！」と訴えた。TVでの呼びかけはやはり効果的。食堂の周りをウロついていた張に食事を与えて皿洗いの仕事をさせていた気前のいいオバサンが、これを見ていたのだった。

＜印象的なラストシーン＞

魏は美人キャスターとそのスタッフらと共に車に乗ってトラックいっぱいの文房具と共に村へ凱旋帰国。これでチョークに不足することもなくなった。さらに、農村の学校の貧しい実情を知った中国全土からは多額の義援金も。「お金を何に使いますか？」と聞かれた村長は、即座にオンボロ校舎の建て直しに、と回答。誰が考えてもそりゃそうだろう。

そんな村をあげた喜びの中で描かれるラストシーンは教室の中。いっぱいもらったチョークで、子供たちは自由に黒板に文字を書いていくシーンだ。

まず、魏は天と書いた。続いて生徒たちは順番に黒板の前に立ち、水、飲、勤、名、土、家……と続き、低学年の小さな女の子は字が書けないので花の絵を書いた。そして張は、「僕は3つ書いていい？」と質問。魏がこれをOKすると、張は、「魏老師」（魏先生）と書いた。たった1人で都会まで出てきて、自分を探してくれた魏への感謝の気持ちが、この3文字とこの素朴なシーンに凝縮されている。

そして、その後も1人1人次々と黒板に字を書き、みんながそれを声をあげて読んでいく。自由に黒板上に字を書き、それを読んで字を覚えていく、そんな基本的な教育がこの農村のオンボロ小学校で今やっとできるようになったわけだ。そんなあたり前の教育ができる喜び、またそんな教育のチャンスを子供たちから奪ってはいけない、そんな思いをすべての観客が共有する気持ちになっていく中で、スクリーンには字幕が流れエンディングとなっていく。

『あの子を探して』という純朴で単純なストーリーだが、やはり張藝謀監督はこの作品で、教育に光をあて、大きな社会的発言をしていることが十分理解できる。

ヴェネチア国際映画祭での金獅子賞（グランプリ）の受賞もなるほど納得だ。

2003（平成15）年11月26日記